

出題 蜚雪ゼミナール

岐阜駅前校・築樋拓真



国語を様々な側面からみて、日本語の面白さや深さを知ってもらえればと思います。

問題【国語】次の言葉の読みを答えましょう。

- (1) 靴
- (2) 長靴
- (3) 手紙
- (4) 紙袋

豆知識 雑学コラム

濁音を見分ける規則

今日は濁音について考えてみましょう。濁音とは「が、ぎ、ぐ、げ、ご」のように、仮名に濁点(・)を付けた形で表される音のことです。細かい文字になると濁点(・)を付いているかが見分けられず、読み間違えてしまうこともあるかもしれません。なぜ、濁音は他の文字と全く違う文字ではなく、「か」と「が」のようにある仮名に濁点(・)を付けた形で表されるのでしょうか。見ていきましょう。

ひらがなが生まれた当初、濁点は存在していませんでした。というよりも実は1927年までは、法律の条文でも濁点を使わずに文を書いています。つい百年前の文章でも使われていないことにはびっくりしますよね。気になった人は社会科の教科書の大日本帝国憲法を見てみましょう。濁音の使われていない条文を見ることができま

すよ。それでは、「探る(さぐる)」のように濁音の入っている言葉を表したいときに、人々はどうやってひらがなで書いていたのでしょうか。答えは「さぐる」であれば、「さぐる」のように「濁点のないひらがなで表す」です。ひらがなが生まれた当初「く」には「く」と「ぐ」の二つの読み方が存在していて、文脈や規則によってどちらの発音で読むのかを決めていました。次に、どうやって「く」と「ぐ」の発音を分けていたのか、その規則の一つを紹介しましょう。

濁音を見分ける規則の一つが「連濁」です。これは二つの語が結びついて一つの言葉になるときに、後ろの語の一番前の文字が濁音に変化するというものです。今回の問題だと「靴」は単体では「くつ」と読みますが、長という言葉とくっついて「長靴」となるので、「ながぐつ」のように「く」が「ぐ」になるというものです。「手紙」の「紙」や、「紙袋」の「袋」も「連濁」の一種になります。他にも、「カニ」と「タラバガニ」など普段何気なく使っている言葉の中に「連濁」がたくさんあふれています。

「連濁」のような規則をみると「か」と「が」の密接なつながりを実感して、全く別の文字にしないで濁点(・)を付けた形で区別することも納得できま

【解答】

- ひんがなな (4)
- なびた (3)
- しんがな (2)
- しん (1)